

人生は苦しい。人生は虚しい。  
そして人生は美しい



前川喜平 「元・文部科学省事務次官」

vol. 6

毎号、著名人に看護や医療、看護師とのかかわりについてエッセイをご執筆いただきます。  
\*姉妹誌「看護」（日本看護協会機関誌）にも同時掲載

学生時代、私は仏教青年会に入っていた。と言ってもメンバーは各学年に1人か2人しかいなかった。ダンマパダやスッタニパータといった原始仏典（もちろん原語ではなく現代日本語訳）の読書会をやったり、秋月龍珉師という師家の指導で座禅修行をしたりしていた。悟りを開く境地には到底達しなかったが、今日の私の人生観や世界観の大元は仏教を通じて形成されたといっている。

原始仏典には二千数百年前にゴータマ・ブツダ（仏陀）が実際に語った言葉が残っているといわれる。仏陀はまず「人生は苦しみに満ちている」と説いた。人生の苦しみを総称して「四苦八苦」という。「四苦」とは「生老病死」、つまり生きる苦しみ、老いる苦しみ、病む苦しみ、死ぬ苦しみだ。さらに四つの苦しみを加えて「八苦」になる。愛するものと

別れる苦しみ「愛別離苦」、憎むものと出会う苦しみ「怨憎会苦」、求めるものが得られない苦しみ「求不得苦」、人間の心と体に生じる苦しみ「五陰盛苦」だ。

その苦しみの因って来たるところは煩惱である。妄執あるいは我執と言ってもよい。常ならざるものを常なれと欲し、我がものならざるものを我がものであれと欲する執着心だ。秦の始皇帝は徐福に命じて不老長寿の薬を探させたが得られなかった。絶対権力を持った皇帝も老いと死には勝てなかった。彼の命は彼のものではなかった。すべてのものは移ろいゆくという「諸行無常」、どんなものにも不変の実体はないという「諸法無我」。絶対の存在はどこにもない。般若心経では「色即是空」と言う。この法則は万物に当てはまるから、もちろん人間にも当てはまる。